



転職・大学教員の ひとりごと

大学卒業と同時に実社会に出て、ほとんどの期間を、研究・教育とは無縁の世界（行政官庁）で過ごした後、大学教員の仕事に就きました。もっとも、その間に数年間、所沢の国立職業リハビリテーションセンターで、職業訓練関係の業務にかかわらせていただいたことがあり、そのときの、指導員の方がたの献身的な取組のお姿と、訓練生の人たちの真剣な学習の様子が、今でも鮮明に脳に浮かんできます。

さて、昨今の大学教員の実態は、——といっても、私ができることができる、ごく狭い範囲のなかでの話ですが、——自分が学生であった頃のそれとは随分かけ離れた、厳しいものとなっています。例えば、毎年度、入学者を確保するために、手分けをして高校を訪問し、先生方に生徒を送り込んでいただくようお願いをして廻ったり、毎学期、その学期に担当した1つ1つの授業科目について、受講した学生からアンケート方式による評価を受けたりしていますが、いずれも以前は、考えられもしなかったことです。

ところで、学生による授業評価は、いうまでもなく、1人ひとりの教員の授業の改善を目指して行われているものであり、私自身も、板書が読みにくい、マイクの使い方が良くない、などといった厳しい指摘を受けて、前よりは、字もきれいになり、声も通るようになってきた感じがしています。

そのような技術的な問題はさておくとして、私個人の大学教員としてのおそらく最大の弱点は、冒頭に述べたとおりの経歴からして、良い大学教員であ

るために必要な研究・教育活動のための基礎訓練を受けておらず、そのためのノウ・ハウも身に付けていない、ということであろう、と自覚しています。

このことは、さらに、(1)特定の専門領域がない、(2)自分の学説を持たない、(3)学術的な用語・文章に弱い、などなどの弱点へとつながっていきます。

そうした弱点に対処する正統的な方法は、無論、弱点克服のための研鑽を積むことですが、それと合わせて、弱点を逆の面からカバーする、といった発想も許されていいのではないかと考えています。具体的に、授業活動の面に即していえば、(1)については、逆に、広い範囲の科目を担当できるようにする、ということであり、(2)については、逆に、さまざまな学説を偏らずに紹介し、学生の思考・選択にゆだねるようにする、ということであり、(3)については、逆に、日常的な用語・文章を使い、わかりやすく講義をするようにする、ということです。

弱点の克服と、逆の面からのカバー、この両面での努力を、今後とも粘り強く続けていきたい、と思っています。

かない まさもと

略歴	1957年	東京大学法学部卒業
	1957年～1987年	労働省（現厚生労働省）勤務（内閣総理大臣官房参事官兼内閣審議官、労働研修所長等）
	1987年～1990年	国立職業リハビリテーションセンター職業訓練部長
	1990年～	国立音楽大学教授、聖徳大学教授